
遙か遠くの物語

因幡 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遙か遠くの物語

【Nコード】

N 8 1 2 1 L

【作者名】

因幡 悠

【あらすじ】

ようこそ『遙か遠くの物語』へ。

私はこの物語の案内人の鈴音と申します。

この物語では、遙か遠く、様々な国で語り継がれてきた童話・民話をお話しています。

悪魔と少年

皆さん初めまして。

ようこそ『遙か遠くの物語』へ。

私はこの物語の案内人の鈴音と申します。

この物語では、遙か遠く、様々な国で語り継がれてきた童話・民話をお話しています。

さて、今回は悪魔と孤独な少年の物語です。

俺の家は割と裕福だった。

ヨーロッパの名家。

欲しい物は直ぐに手には入った。

両親は仕事で年に数回しか帰らない。

家にはメイド達が沢山居たけれど、常に一人。

いつも孤独が付き纏う。

そんな時目の前に悪魔が舞い降りた。

その悪魔は俺と同じくらいの背丈で、とても可愛らしく、美しかった。

その悪魔が微笑んで言った。

『私と契約しない？』

突然の誘い。

已むに已まれぬ好奇心。

その誘惑によって、俺は了承した。

『じゃあ、契約成立ね。でも、悪魔と契約したら必ず対価を払わね

ばならないわ』

セシルと名乗る悪魔が言葉を発するだけで心臓が跳ねた。

「その対価って一体？もしかして、死んだ後魂を貰うとか言う・・・」

すると悪魔がクスリと笑う。

『やあねえ。そんな事しないわよ。悪魔にも色々あるのよ。確かに昔は契約終了後、魂を貰う悪魔もいたけど、今じゃないわ。無意味な事も証明されたし、対して魂なんか美味しいもんじゃないしね』

「そうか。じゃあキミはどうするんだ？対価って？」

『私が貰う対価はね、“愛”よ』

「愛・・・？」

『そう、愛。悪魔が貰う対価は自分の能力と同じモノ。だから契約内容は『貴方が私を愛し続ける事』よ。貴方が私を愛し続ければ、私も貴方を愛する事が出来る。願いを叶えてあげられるわ』

悪魔が静かに微笑む。

『準備は良いかしら？私のご主人様』

メイド達にセルト様と呼ばれるのには慣れている。ただ、ご主人様と呼ばれ、胸が高鳴るのが分かった。

「でも俺は今まで人を愛するとゆう事を経験したことがない。人を愛するとはどんな事かさえ分からない。それでも大丈夫なのか？」

悪魔が頷く。

『貴方が私を見た時に美しいと思ったのなら大丈夫ですよ』

俺は思った。

もしかしたらその美しい、可愛らしいと思う気持ちこそが、恋の始まりなのではないかと。
分かるかも知れない。

人を愛する気持ち。

『では契約を』

そう言う悪魔が擦り寄り、不意に、俺に口付けをした。

「なっ……!？」

すると薔薇の吹雪が舞う。

実際に薔薇が舞っていた訳ではない。

だが、確かに薔薇が見えた。

悪魔に魅せられていたのだ。

『これより私はセルト様のモノ。ですから私に名前を下さい』

一瞬にして服装が変わり、メイドの服装と近い物になった。

『私はセルト様の専属メイド兼屋敷のメイド長をさせていただきます。
それに相応した名前を宜しくお願いします』

名前を付ける……。

これ程悩むなんて。

悩み続けた末に結論を出した。

「お前の名前はネレイド。ネレイド・バジルだ」

『ネレイド。素敵な名前ですわ』

悪魔、改めネレイド・バジルは深く礼をした。

それからはネレイドは毎日作業を楽々熟していった。
とても良く働いてくれている。

「ネレイド、少し良いかい？」

『はい』

「何かねえー、悪魔と契約したってゆう感覚全く無いんだけどさあ」

『そりゃそうでしょうね』

ピシャリ。

『でも感覚が無いだけで、実際変化はありますよ？だってセルト様は今、寂しくは無いでしょう？』

確かに寂しさは無くなった。

毎日が満ち足りている。

「そうか……。その変化が既にそのものなのか」

『ええ』

ニツコリと微笑むネレイドの顔を直視出来ない。
きつと今俺は顔が真っ赤なんだろう。

「なあ、ネレイド。俺はキミの主人として相應しいかい？」

『ええ。理想のご主人ですわ！』

この幸せがいつまで続くか分からない。
だけでも少なくとも今、この時は孤独ではない。
だから幸せに埋もれて気が付かなかった。
迫り来る影を

悪魔と少年

「ネレイドー。ネレイドー？居ないのか？」

セルトは深いため息を付いた。

「何処行っただアイツは……」

「メイド長でしたら中央でお花を生けておいでですよ」

驚いて、咄嗟に後ろを振り向く。

「何だ……ミラか」

「まあ！何だとは何ですか！ご不満ですか？」

誤魔化すのも面倒なので、適当にあしらって中央へ向かった。

「ネレイド。それは何て花？」

『山百合ですわ。セルト様なら御存知かと思っ居りましたが、遠目からではお分かりになりませんでした？』

行き成り現れたセルトに驚く様子もなく応えて見せた。

「嗚呼。確かに良い香りだ。それにこれは屋敷のものだね？」

するとネレイドはクスクスと笑い出した。

「どうした？」

『いえ。只、先程は私が驚かなくて悔しかったのではないかと思いまして……。すみません今更』

セルトは顔を真っ赤にして見せた。

「でも良い。ネレイドと居られるだけで俺は幸せだから……。孤独を味わう事はなくなったから」

『まあ。光栄ですわ』

「いい。今は対等な立場でいたい」

縋る様に抱き締めるセルトの頭を優しく撫でる。

『セルト。もつともつと愛を頂戴？』

キスは対価の受け渡し。

それが唯一無二の繋がり。

こんなものがなければ繋がってられないのが悪魔と人間。

それに心奪われるのも人間の愚かさ故。

だが時に、冷酷な悪魔に成りきれず、己が心を奪われる悪魔もいる。

『それも又愚かさ故』

遠く二人の姿を見ている人影が一つ。

言葉を紡ぎ出す。

『しかし心奪われた悪魔は、元に戻さなければならぬ。だから

殺す。主人を殺して、悪魔自身の記憶を抜き去る。人間等は愚

かな生き物だ。野蠻で貪欲。我々悪魔と天使が、秩序を守るべく作り上げた世界をいとも簡単に汚す。そんな人間如きに悪魔を左右させてはならない』

男はペンを取り、紙の上を走らせた。

『これよりセルト・ナイルの排除。及びに悪魔セシルの記憶消去を開始する』

と、本のページには書き記されていた。

「ねえネレイド、少し良いかい？」

『はい』

柱の陰から手招く主人に微笑んだ。

『何でしょうか？』

「実は最近ね、体調が優れないんだよ」

『体調……ですか？』

怪訝そうな表情。

『セルト様は御両親のお手伝いでお忙しいですし、お疲れなのではありませんか？』

「うん。そう思って医者に診てもらったんだけど身体に問題は無い

し、精神面でも問題はないらしい。過労もなく、至って健康体だつて」

『そうですか……。私に一つ思い当たる事が……。いえ、止めておきましょう』

軽く首を横に振るネレイド。

「何だよ……。話してくれないのか？」

するとネレイドは表情を曇らせた。

『私の……。せいかも知れません』

「どう言う事だ？」

『私が貴方を　　！』

「そうか……」

二人は沈黙の中に居た。

先程ネレイドから話を聞いた。

ネレイドによると、原因はネレイド自身にあるらしい。

悪魔が契約する人間。

それは異性でなければならない。

だが時に契約者に恋心を抱いてしまう悪魔もいる。

だからその悪魔を救う為に契約者を殺すのだと言う。

「つまりはネレイドが俺を好いてくれているから、俺が殺されるんだな？」

『はい……。もう……。私は貴方の側を離れた方が良いですね』

そのままその場を立ち去ろうとするネレイドを引き留めた。

「いや、いいさ。寧ろそんなに愛されるだなんて嬉しいね。好きな娘に殺されるなんて、俺は本望だよ」

微笑むセルト。

『セル……。ト……。！ありがとう……。』

そのままネレイドは泣き崩れてしまった。

それから徐々にネレイドは“忘れる”事が多くなった。

俺の事だけを。

確実に。

そしてその日は訪れた。

昨日までは何を忘れても、俺だけは起こしに来た。

だけど今日は違う。

屋敷の中は静まり返り、人気は全くない。

体も身動きが出来ない。

「ネ……。レイド……。ッ！」

やっと絞り出した声も、誰にも届かない。
ネレイド

『セシル。君は危ないから、離れていなさい』

『ライドさん、何故この家を焼いてしまうのですか？』

そこにはセシルと呼ばれるネレイドと、ライドと呼ばれる悪魔の姿があった。

『そうだねえ』

優しく微笑むライド。

『危ないからだよ』

そして 炎が放たれた。

熱い。

呼吸が苦しい。

「ゴホッ・・・ゴホゴホ」

ネレイド

「せめて・・・最期は君に傍にいて・・・欲しかった」

その言葉は届くはずがない。

だがセシルは涙を流していた。

『セシル、大丈夫かい？』

『ライドさん、私行かなきゃ』

その言葉をライドに告げた直後、セシルは走り出していた。

何故こんなに苦しいかなんて分からない。
だけど私は行かなければならない。
セルトの元へ。

『セルトって誰？』

そんな言葉が口を突いて出た。
でも構わない。
行かなきゃ！

『セルト！！』

ドアをこじ開ける。
炎の回りが早くて熱い。

「あは・・・ネレイドが・・・いるよ。到頭・・・俺も死んだか・・・
？でも・・・最期の願い・・・叶った・・・な。じゃあね・・・ネレイド・・・」

そこで命が途切れた。

『ごめんね？私思い出したよ、セルト。でも間に合わなかった・・・。
助けられなかったよ。だから、最期まで傍にいるね？ずっと』

黒い羽根を広げた悪魔。

その羽根は何よりも黒く、何よりも清い。

その日、消えることのない筈の悪魔の魂が、一つ、消えた。
主の魂と共に

如何でしたでしょうか？

楽しんで頂けましたか？

昔々あるところ、又逢える日まで、ご機嫌よう。

狂愛の黒猫

皆さんこんにちは。

ようこそ『遙か遠くの物語』へ。

前回に引き続き、案内人を務めさせて頂く鈴音と申します。

この物語では、遙か遠く、様々な国で語り継がれてきた童話・民話をお話しています。

さて、今回は狂おしくも愛しい黒猫の物語です。

君が喜ぶ事、してあげたいよ。

君の笑顔が見たいんだ。

何で泣いているの？

キミを悲しませる存在。

キミを苦しませる存在。

全てボクが消してあげるから。

だから泣かないで。

ボクの世界でたった一人、大好きなキミ。

ボクは元々捨て猫だった。

寒くて、暗い箱の中に閉じ込められていた。

そんなボクを拾ってくれたのはキミだった。

それからは、ボクはキミの側を離れないと誓った。

ずっと一緒にいるんだ。

キミの笑顔を守るんだ。

だけどボクは、また捨てられた。

キミの存在を煙たがる人達によって、殺された。

ナnde殺サレナキヤナラナイノ？

ボクハ悪い事ナンデシテイナイノニ。

キミヲ守レナイ。

悔シイヨ。

その想いがボクを魔物へと変えた。

これでまたキミを守るね。

キミがまた笑顔を見せてくれた。

それだけで存在するには十分だよ。

キミは何が欲しい？

何を望む？

何がいらない？

何が邪魔？

全て叶えるよ？

“あの人たちが許せない”

キミが指さした先には、ボクを殺した奴ら。

“あいつらが許せないならば葬り去ってあげるよ”

キミの為。

“少し後ろを向いていたら、すぐに終わるからね”

キミは瞳を閉ざし、後ろを向く。

“さあ、死んで？”

不快な音は立てやしない。
キミが嫌だと言うからね。
部屋も全てが元通り。
違うのは、そこに人がいないこと。
存在しないこと。

“ ありがとう、ロイ ”

キミのその言葉が、ボクにとって唯一の安らぎ。
次は何をしたい？

“ 次はあれがいらないわ ”

キミに危害を加えようとした奴ら。
全部全部壊すよ。
消すよ。

“ 次はこれ ”

“ その次はあっち ”

ねえ、何で泣いているの？

“ 淋しいのよ ”

どうして淋しがるの？
ボクがいるのに。

“ いつか別れが来てしまう。ロイが居なくなるのが怖い ”

そうか。

ならずと一緒に居ればいい。

ボクはキミの側を離れない。

朽ち果てる時までずっと

。

如何でしたでしょうか？

古来より黒猫は幸運・不運、どちらの象徴にもされて来ました。
ですが私はこう考えました。

もしかしたら黒猫は、愛や服従、狂気の象徴なのではないかと。
皆様は如何ですか？

何にせよ、それは貴方の思う事。

貴方の心のままに。

昔々ある処、また逢える日まで、^ご機嫌よう。

私の理由

皆さんこんにちは。

ようこそ『遙か遠くの物語』へ。

案内人の鈴音です。

今回で『遙か遠くの物語』は最終回を迎えます。なので今回は、私が物語の案内人になった理由をお話しましょう。

ずっと平凡な毎日が続くと思っていた。

友達と笑い合い、恋をする。

勉強で悩んだり、将来像を描いて見たり。

そんな日々が続くと思っていた。

続いて欲しかった。

だけである日、それは幻と化した。

きっかけは一つのサイト。

小説が掲載できるサイトへアクセスした。

そこで私が見た小説は、『遙か遠くの物語』。

皆さんこんにちは。

ようこそ『遙か遠くの物語』へ。

案内人の因幡です。

今回で『遙か遠くの物語』は最終回を迎えますので、私が案内人になった理由をお話しましょう。

どうやら今回で最終回のようにだった。

「以外と好きだったんだけどなあー」

終わりを少し淋しいと想いながらも、物語を呼んで行く。

昔々ある処、また逢える日まで、ご機嫌よう。

さあ、次は貴方の番。

案内人は貴方です。

物語はその言葉で締めくくられた。
直後、背後に感じた悪寒。

「体調・・・悪いのかな？」

そして私は眠りについた。

「サア、今度ハ貴方ノ番。早くコツチヘオイデヨ。モウ交代ノ時間
ダワ。ヤット私ハ開放サレル。サヨウナラ、鈴音サン」

夢の中で誰かが喋っている。

待って！

行かないで！

そのまま私は目覚めなかった。

永遠に夢の中で次の案内人が来るまで彷徨い続ける。

「ダカラ待ッテイタノヨ？次ノ案内人が来ルノヲ」

そう、貴方が来るのを

如何でしたか？

言葉の意味はお分かりになりましたね？

そう、次は貴方かも知れないのですよ。

昔々ある処、また逢える日まで、ご機嫌よう。

さあ、次は貴方の番。

案内人は貴方です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8121/>

遙か遠くの物語

2010年10月11日23時25分発行